



知らない誰かからの贈り物

大田区立大森第七中学校 三年 中村 朋佳

夏休みに教科書を整理していたら、背面の「これからの日本をになう皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています」という文が目に入った。教科書を税金で買っているのは知っていたが、期待が込められているというのは新しい発見だった。新しい教科書に名前を書くときの期待と緊張感の入り混じった気持ちは、税を納めている沢山の人がくれたものだ。改めて教科書を買うお金を税として納めてくれた人、税を私達のために使おうと決めてくれた人のことを考えてみた。何気なく使っていた教科書が、沢山の人の思いとエールが詰まった特別な一冊に見えてきた。思いも寄らないタイミングで税の恩恵を感じることになった。

しかし、よく聞く税に対する言葉は、「税が高い」「税から逃れたい」など負担だけに目を向けたものばかりだ。確かに大きなことがなければありと税の恩恵を感じることはないだろうし、お金は手元から消えるのだから損した気分になるのは仕方ないと思う。けれど税は、納めてこそ意味を成すと思う。

突然納税の義務が消えるとしたら、人々はどうなるのか。社会の授業で知った国を思い出した。かつて地中海沿岸で栄えていた国だ。元は小

さな国だったが、戦争に勝ち、国民は税を免れ、代わりに征服した土地で徴収した大量の税金が回ってきて、働かなくても食料と娯楽を手に入られるようになった。勤勉で知られていた国民は、娯楽に溺れ、政治に関心を持たなくなった。また途中からさらなる贅沢を求めるようになったらしい。恩恵を受けるだけになったせいで、税を納める人々への感謝を忘れ、人任せになってしまったのか。その国はみるみる衰退していったとされる。私は、日本が長く続いてきたのは昔から納税の制度が続いていたからではないか、日本に税があつてよかった、と思った。

税を納めることには、暮らしを豊かにすること以上に、税を通じた助け合いで知らない誰かと繋がり、社会に関心を持つ役割もあると思う。私達は、自分が納めている税は必ずどこかで誰かの役に立つこと、当たり前に過ごしている「今」は沢山の人の税によって支えられていて当たり前ではないことを忘れてはいけない。一人勝ちはできないと思う。

先程も述べたように、税の負担ばかりに目を向ける人は多い。私もそのうちの一人だった。そんな人たちに、今一度身近にある小さな税の恩恵に目を向けてみてほしい。そして、税を通じた人々の繋がりに思いを馳せてみてほしい。普段何気なく使っている公共施設や道路などが特別なものに見えてくるはずだ。

私は、あと数年で大人になり、多くの税を負担するようになる。今は与えられた環境を最大限に活かし、沢山勉強して視野を広げようと思う。そして大人になったら、「負担」ではなく「恩返し」ととらえ、税を納められるようになりたい。